

健康 ぷらざ

中高生や若者に蔓延

- 覚せい剤の恐怖 -

指導：日本医師会常任理事

西島 英利

企画：
日本医師会

No. 78

きっかけは遊び気分

いま、覚せい剤を使う人が急増しています。とくに、中学生や高校生に増えているのが最近の傾向です。遊び半分や“痩せるために”と気軽に使いはじめ、最初は禁断症状がないので怖いことがわかりません。

使い続けると...

使い始めは精神的に急に元気が出てきて、怖いもの知らずになり、数日間眠らなくてもまったく疲れを感じることなく、おしゃべりになったり、怒りっぽくなったりします。ところが使い続けていると、だんだんと量を増やさなければ身体のだるさに耐えられなくなり、そして徐々に脳をむしばんでいき、幻覚・妄想が生じてきます。

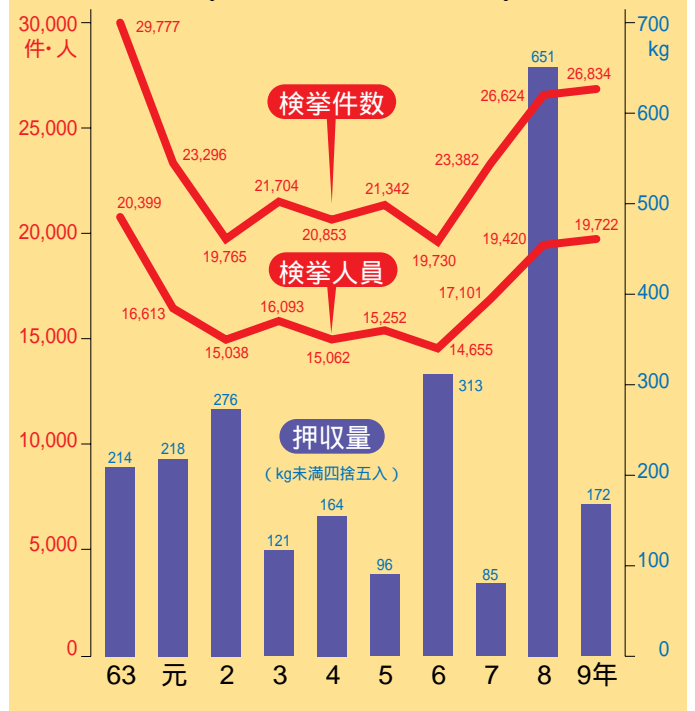


幻覚・妄想におびえ、果ては崩壊

幻覚・妄想で「誰かが自分を殺そうとしている」とか、誰もいないのに「恐ろしいことが聞こえたり見えたりする」ようになります。さらに進むと「天井に人が隠れていて、自分を監視している」「食べ物の中に毒がはいっている」などと訳のわからないことを言うようになって、不安や恐怖からソワソワして落ち着かず、急に大声を出したり、部屋の隅でブルブル震えながら閉じこもったり、殺人を犯したり自殺することも数多くあります。

だんだんと量が増えていくので、覚せい剤を買うお金欲しさに売春をしたり、ついには凶悪犯罪を犯すことにもなってしまいます。覚せい剤の恐ろしさは、快感のあとに人生が崩壊していくことです。

覚せい剤事犯の検挙状況の推移
(昭和63年～平成9年)



作図資料：平成10年度版 警察白書